

服部章蔵と中国地方伝道

栗原千鶴

服部章蔵は初代プロテスタント教会の指導者の一人である。氏の家系及び生い立ち、基督教入信とその後の伝道の生涯については、氏自筆になる「服部家々譜」及「自伝」に詳しい。両著とも現在服部家に保存されている。

服部章蔵は嘉永元年12月23日周防国吉敷郡吉敷村（現在の山口市吉敷）に服部良輔・淑子の二男三女の次男として誕生した。服部家は代々吉敷毛利氏に仕えた儒家で母方の祖父父傳巖^{ふがん}先生は郷校憲章館をおこした学者として知られ、父良輔は漢学者東陽先生として著名である。章蔵は4才の時より漢学を修め、又母に従って孝経を学んだ。7才の時郷校憲章館に入り桂瀬兵衛に学んだ。12才の時父良輔が桂瀬兵衛の後をついで学頭となったので郷校に止宿して専ら漢学を学んだ。14才の時郷校の句読師に任ぜられ15才のとき都講となり、邑主の命によって弱邑主の伽役となって覇城に赴き、文久3年16才の時小姓役に転任した。ときあたかも幕末の激動期でありこの年6月下関事件がおこった。

翌元治元年はじめ脱藩して浪華に登るが帰され再び藩主の命により京都に上り7月19日の蛤門の変に加り敗れて西宮から海路帰国し、弱邑主の小姓兼学友として明倫館の漢学塾に学んだ。蛤門の変で朝敵とされた長州藩では第一次征長軍をむかえて保守俗論派と正義派との対立抗争が激化し、保守派は幕府への恭順によって藩と自己との安全を求め藩主父子は萩城幽閉謹慎し、禁門の変の責任者三氏に自刃を命じ4参謀を斬罪に処したのである。章蔵の父良輔もこのために職を転ぜられた。12月16日高杉晋作が藩

論を回復せんがために下関に挙兵し、長州藩内戦がはじまった。高杉の兵を山口にむかえた章蔵は同志8名と共に脱呂従軍した。この藩内戦は正義倒幕派の圧倒的勝利におわり藩の実権は正義派の手にかえり藩主毛利敬親は萩から山口に移った。倒幕派が勢力を恢復し長州藩の態度が一変したので幕府は再度征長軍をおくった。章蔵は小隊を率いて従軍した。此の間、上司に不服従とのかどで割腹を命ぜられるが河瀬二郎のとりなしによって禁固を解かれるという事件がおこった。この事件をきっかけとして服部は村を去り藩主より学資を給され山口明倫館の大村益二郎の兵学寮に入学した。

明治元年王制復古の令によって長州藩では出兵したので服部も大村に従い京師に上り又東北の戦争にも従軍した。役を終えたとき服部はこれまで大村について蘭学を学び、未知なる広大な世界のあることを知ってはいたが、さらに西洋諸国の事情を知るには英語を習得することが肝要であると覚り英学習得を志したが志を得ることができず山口明倫館に帰り機会を待っていた。明治二年服部は脱藩して上京、岩倉公に寄宿し又、香川敬三の援助のもとに開成校に入り英学を修め変則（訳読）を福沢諭吉に学び、兼学を近藤芳隣に学んだ。この頃1日、服部は1才年長の森有礼と心靈上のことにつき論じ「独一無二の上帝」の存在を知らされ心ひかれる。又同藩出身の伊藤俊輔・井上聞多両氏を訪ね英学教授を請うてその承諾を得たが両氏とも多忙なため実現に至らなかった。明治3年横浜修学館の監督兼訳読教師となり又長州藩より留学生の管理を託された。かたわら修学館でブラオン氏に学び又横浜毎日新聞の社説執筆、及外国新聞の翻訳なども担当した。この横浜時代友人とともに居留地のヤソ寺を訪ね隣家の米国医ヘボンに問合せ初めて禮拜に出席ブラオンの説教を聴聞したこともあった。明治4年8月神奈川県知事が代り修文館長伊東弥次郎が辞任したので服部も修文館を辞任上京し、東京育英義塾の設立に関係し塾監兼教授となった。明治5年8月秋文部省に入り外国教師掛兼学務掛を任命、11月当時築

地の海軍兵学寮に転任、英学教授となった。

服部は英学を通して西洋事情を学び西洋文化にふれ、彼我の文化の差を知り日本国を1日も早く彼の位置にあげんとした。そして当時世界の海に雄飛発展していた英国に地理的に共通せる東洋の一島国日本の前途をその海軍力によって拓かんことを願ひ海軍兵学校教官を天職として志したのであった。そして服部はこの海軍兵学寮教授時代に上司粟津高明によって基督教へと導かれるのである。

服部は武士の子弟として儒教的教養のうちに成人したのであるがその履歴が示すように幼少より武人であり豪放の人であった。朱子学を学び学の進歩とともに知行の一ならざるをうれい、知行合一の道を求めて陽明学へと転じ、死生の一ならんことを求め、良知良能を琢磨し得んことを多年にわたって努力したが一こうにその効なく本心の平安を得ることができなかった。又、7・8才の頃より酒を嗜み青年時代には相当の酒豪であり酒の上の行動態度に自責反省を覚えつつも飲酒の悪癖から脱することができなかった。又、多年の従軍による殺伐たる生活への反省は良心の苛責となって内に切々たる悔悟を命じたけれども自力に於てこれを為すことは不可能であった。経書の研究によってはいよいよ心切迫し身の置き所を知らずこの精神的苦痛を忘れるためにますます酒量は進むばかりであった。服部が粟津に導かれたのはこのような内的生活を送りつつあった時代に於てであった。

服部は粟津宅の聖書研究会に出席する便のために粟津宅の近くに転宅した。聖書を学ぶことによって祈りへと導かれ、祈りの力によって服部積年の切望であった断酒を実行することができた。さらに自ら聖書註解書を購求し聖書研究に打ちこんだ。やがて導かれて新栄教会に出席し、インブライ氏にルカ伝を学び小川義緩宅のロマ書研究会にも出席し「人は信仰によって義とされる」との福音の言ことばに接し光を見出した。かくして服部章蔵は明治9年4月9日新栄教会に於てタムソン牧師より受洗した。氏29才の

時である。

長年救を求めて得られなかった服部が福音に接して回心・受洗して新栄教会の一員とされるや氏のうちにあふれる衷なるよろこびは如何にもしてこの喜びを他の人々に頒かたざるを得ないという熱烈な伝道の精神となつて燃えあがった。受洗後の服部は兵学校勤務中も余暇を得れば聖書その他神学書を求め自ら研究し、又勤務を終えて後は夜間築地神学校に通い一日に僅か3時間程の勉強ではあったが約3カ月間聴講し、聖書・説教など学んだ。又、芝区巴町の自宅に毎週近隣の人々を集めて伝道した。かかるうちに服部は兵学校の教官として将来の帝国海軍のために教鞭を執ることよりも大和民族の精神大改良のために福音を宣伝することの方がより急務であり重要なことであると痛感するようになった。そして福音宣教によって皇国を救済しようとの聖なる野心に促がされて官を辞して伝道者たろうと決意した。しかし経済的事情その他もあり直ちに官を辞することもできず逡巡のうちに3ケ年の月日が経過した。服部は明治9年には新栄教会の長老に選ばれ10年4月には東京中会に於て青山氏らとともに伝道試補者となり将来の働きに備えていた。此の間一夕、友人青山昇三郎が来訪し、談が伝道の事に及び、恰も同気相覚るが如く一致し、意気投合した2人は相携え主の名の為に勞せんと発言しここに将来の協力伝道をかたく約束した。そして下関を伝道の地として定めたのである。その理由は「下関ハ西国ノ咽喉ニテ九州及北海ノ船舶常ニ通航スル海峽タルヲ以テ乗船ノ旅客ハ必ズ上陸スル事ト定メラレタルガ如シ、是以テ爰ニ道ヲ伝ヘツツアレバ福音ヲ自然此等地方ニ宣伝スルコトナルト一ハ長崎神戸間ニ将来教会ノ連絡ヲ持ツニ至ラント、一ハ下関ハ我カ生地ニ近キヲ以テ此ヨリシテ福音ヲ山口其他ニ伝ルノ便ナルトヲ考ヘ予ハ下関ト定メタリ」と述べている。

明治11年10月頃より静夫人が病気に罹り再起が案ぜられた。翌12年4月郷里の母堂病あつし速かに帰省されよとの報せが届いた。服部は母堂の看護と夫人の療養のため4月10日兵学校の職を辞して帰省の途についた。横浜

より海路神戸を経て三田尻に上陸し、郷里吉敷村に着いたのはその月の末であった。母堂と夫人の病氣看護の余暇をみて服部はまづ山口に伝道を開始した。笠小路札の辻に講義所を開き、郷里吉敷村では村の小学校を借りて演説会を開いたが基督教に対する反対が激しいので中止し、同村の沢山保羅の両親宅を講義所として毎週講義をした。8月2日夫人静は昇天、県下初ての基督教による葬儀がおこなわれた。母堂の病氣はやがて快方に向った。10月服部は下関に出て念願の伝道に専心することとなった。下関では基督教に対する反対迫害の気運つよく伝道所開設のための家を借りることができなかつた。そこで服部は学校設置の策をたて官途に出願許可を得、入江和作の斡旋によって、田中町上筋に一字を借りることができた。しかし近隣の人々が基督教を嫌ったため寄留届の5人組の捺印をうけることができず服部は戸長と談判して無捺印の寄留届を提出し受納せしめたというほどであった。此の学校は校名を赤間関光塩英学校と称し生徒26名をもって開校した。一方、5月21日に赤間関に上陸した青山は市民の基督教嫌忌のため旅宿を転々し、一時コレラ病の流行のために山口の服部宅にのがれたが9月下関に至り仮寓にて伝道の策を講じ来関の服部と協力伝道を推進し、やがて家を借りることができたので其処を講義所としてさらに長府にも伝道を開始した。両氏の伝道は実を結び翌13年12月25日28名の会員をもって赤間関教会が成立した。伝道の方針について青山氏は一カ所を墨守し之を堅固にするの必要を主張し、服部は力の及ぶ限り広く福音を伝えるの肝要を論じ両者の主張が対立した。青山氏は長府に移住し其の地の伝道に専念し服部は下関市内及近郊の小野村にも伝道所をひろげさらに対岸の小倉市にも伝道を開始した。14年5月、服部は山口に定住し山口を中心として津和野・広島・岩国・三田尻等の伝道にも着手した。この結果翌15年6月14日会員17名をもって中会の允許を得山口教会が設立され、17年には広島教会が、24年には津和野教会が設立された。又青山氏の長府伝道は17年の豊浦教会建設となった。

明治10年代に於て中国地方の伝道は何れの教派、ミッションに於ても未だ着手されていなかった。北部バプテスト教会のアップルトンが山口県下に伝道を開始したのは明治20年である。服部章蔵は中国地方基督教伝道の開拓者というべきである。

では服部の中国地方伝道に於て、彼が最も意を用い努力したのは如何なる点にあったのであろうか。前述のように将来ある海軍兵学校教授の職を辞して伝道の生涯に献身するに至った氏の動機は福音の恩寵に浴した氏の感激からあふれる魂救済への熱情であった。「同胞ノ中、我黑暗生涯ヲ送りシカ如キ者日々滅亡ニ至ル者ノ多キト将来ノ自国ヲ慮ル憐心ヨリ海軍教授タルヨリ天堂ノ教授ノ大緊急ナルヲ感シ」「大和民族ノ誠神大改良ノタメニ福音ヲ宣伝スルノ急務ナルヲ確信スルニ至リ此ノ志ヲ遂ンコトヲ決シ皇国ヲ救済セント確定」した当時の青年の多くが抱いた新しい日本国家の経綸に参与せんとする国民としての抱負であった。彼は使徒パウロの如くに独立自給の生活をもって日本国中を横行し基督の御名がまだ唱えられていない所に福音を宣べ伝えることを熱望した。しかしそれは不可能であったので伝道の志のあることをタムソン氏に告げミッションの補助を願出した。当時ミッションは日本人伝道者には十円の謝金を以てしていたがこれは当時海軍兵学校教授であった服部の俸給に比して極めて僅少の額であった。伝道に着手した明治12年の郷里帰省中の伝道は「ミッションノ補助ヲ受ル事ナシ、尽ク自費ヲ以テ之ヲ成シ」たのであった。服部の伝道によって明治10年代に設立された地方教会にとって最も大きなもんだいは教会の経済的独立の問題であった。明治10年代までに基督教は文明開化の風潮もあって大都市に於ては一応順調な伝道の進展をみたのであるが、地方都市に於ては徳川三百年の禁教政策とそれを踏襲した明治政府の宗教政策が、民間に於る基督教嫌忌の感情や偏見となって長く残存していた。又そのような環境の中から基督の福音に接して教会を設立した人々とはいえそれは小さき群であり導かれ養われて基督の教会形成途上にある人々であつ

た。そしてその経済的基盤は極めて脆弱であった。新しく成立した教会の多くはミッションの補助のもとに支えられていた。教会員の中には独立心乏しく「何ニ事ニ在テモ皆「ミッション」ノ入費ヲ以テ支払ヒ来リシヲ以テ大ニ依頼心ヲ養成」するものもあり、代議員として中会等に出席する長老の中にも代議政体なる教会政治についての理解を欠き「其出席ノ雜費ハ「ミッション」ノ負担スル所タリシヲ以テ自己ノ不便アラバ出席セス、教会ニ其幾分ヲ負ハシムレハ出席ヲ欠クカ如キ感ヲ免レズ之ガ為長老議會ノ如クナラス教師會議ノ如ク」であった。従って当時「宣教師等ガ全権ヲ以テ日本人ヲ圧制スル者ナリ」と感ずる日本人基督者もあったのである。服部を基督教に導いた粟津高明氏はこのような傾向にあきたらぬこともあってのち自邸内に小教会堂を建築し分離して日本教会を設立したほどであった。

明治五年宣教師バラの指導のもとに横浜に設立された日本最初のプロテスタント教会は教派を超越して日本に基督の教会を建設しようとして、そのエキュメニズムを表現した「公会」という名称を用い日本基督（横浜）公会として誕生した。その同じ立場を支持する人々によって明治10年頃までに各地に11の公会が設立された。服部の受洗し所属した新栄教会は日本基督（横浜）公会の東京在住信徒によって明治6年に設立された東京基督公会が明治8年に至って築地新栄橋附近に会堂建築して以来の名称である。明治9年5月米国プレスビテリアンミッションはリフォームドミッションに対し日本に於ける両ミッションの協力及日基・長老両公会の合同一致の交渉を申し込み、リフォームドは直ちに快諾し、5月16日両ミッションの宣教師はフェリス女学校に会し決議し、明治10年10月日基・長老両教会の代表は海岸教会（旧横浜公会）に会して合同教会たる一致教会が成立した。服部章蔵はこの日本基督一致教会の教師としてミッションに所属し伝道に従事したのである。

服部・青山の協力によって明治13年12月に設立された赤間関教会は翌14

年には順調に発展し新たな受洗者も加えて、その会計は献金額38円63銭3厘の教会に成長したが、服部の山口移住及び16年の豊浦教会の分離設立によって教勢は急速に衰えた。さらに自由民権運動が盛んになるにつれてそれと同一視された基督教は、明治政府との関係浅からざる山口県下に於ては教勢不振を助長し明治20年に於る赤間関教会は会員数十名位までに減少した。豊浦教会も同様の影響を免れなかった。明治23年には赤間関教会牧師青山によって豊浦・赤間関両教会の併合案が提出されたがこれは鎮西中会の容れるところとはならず実現に至らなかった。明治22・3年になって赤間関教会は10名内外の受洗者を迎えてようやく発展に向い翌16年には会堂を建築、38年6月に至ってミッションの補助金を謝辞して自給独立を達成した。教会設立以来25年目である。

一方服部は山口に於て自給独立の伝道をおこない最初の山口での受洗者である医師坂本友吉宅を15年5月成立した山口教会の仮会堂としていたが、坂本はじめ会員の協力及びミッションの補助によって17年会堂建築を起工18年3月に新会堂が献堂された。服部は広島教会に招かれ19年7月に転任したので、山口教会は以後ミッションの補助のもとにあったが23年広島を辞して山口教会に再任した服部をむかえて明治30年に至り服部の謝礼金を月14円として自給独立を達成した。

広島伝道は明治14年に開始された。13年9月に中島留吉が後援のため東京より来任、服部とともに山口に定住伝道を開始したが山口は中島の健康に不適であったため、翌春中島は広島に移った。服部は山口より高木信吉を後援のため広島に遣し、県庁前に一字を借り講義所となし伝道をおこなわせた。その直後広島伝道について組合教会伝道会社との交渉もあったが、数年後南メソジスト教会が伝道を開始し、組合教会は10数年おくれて広島に伝道した。広島伝道は服部がミッションに請うて常任伝道者となした高木熊二郎に引つがれた。服部は毎月一回山口より後援のため赴き、明治16年11月28日19名の会員をもって広島教会が設立された。その後高木が

去って無牧となった広島教会は長老等の治会するところであったが紛擾が生じたため服部はその解決のため招聘を受け止むなく山口教会を辞して19年7月広島に転任した。服部はこれよりさきミッションに要地にミッションステーションの設置を献策し容れられて先づ広島にミッションステーションが置かれることになりブウイマン氏が常住することになり又女学校も建設されて広陵女学校と称した。服部は 控訴院長堤の 求めによりブライアンをして 英語教授を 担任せしめるなど 広島法律学校の 建設にも関係した。

服部の広島伝道は 明治20年10月 に至るまでの 1カ年余にすぎなかったが、此の間に於て陸軍部内、控訴院及弁護士の間にも伝道、さらに竹原・四日市・徳山・萩等にも伝道した。当時外国宣教師の内地旅行が不自由であったためまづ邦人が伝道地に赴き伝道の基礎をおかざるを得なかったので服部の開拓伝道はこの点に於て大きな役割を果たしたのであった。この頃日本基督一致教会と組合教会との間に合同問題がおこった。服部が20年の教会大会に於て合同の動議をなして可決されたのであるが、やがて東京の各教会内に反対論が強力となったのでその説得の責任を感じた服部は東京の教友の勧告もあって20年10月広島教会を辞して東京牛込教会に転任した。組合教会との合同問題は服部の意とは反対の方向に解消していったが服部を迎えた牛込教会は教勢盛大にむかい会衆は満堂に溢れるほどとなった。しかし服部は3年の後広島教会に生じた紛争解決のため招かれて再び広島に転じ、広島教会は間もなく平和を回復した。

服部が広島・東京に在る5カ年の間に山口教会では内紛が生じたので服部に山口帰任を求めてきたので服部は明治23年山口に帰任することになった。そのさい服部は山口に広島の広陵女学校を移すの益なることをミッションに提言し、ミッションもこれを容れることとなった。

服部の第2回山口教会牧会時代は明治23年10月から明治35年4月神戸転任に至るまでの12年間である。

23年9月26日には山口英和女学校建設についてエーレス夫妻及びミス・カスパルトが山口を訪れた。広島教会を辞任した服部は山口の早間田町に居を移した。12月20日服部は山口英和女学校創立願書を県知事に提出、12月26日異例の早さで許可となった。県知事原保太郎は服部の東京時代からの友人であった。明治24年広陵女学校との合同校である山口英和女学校が山口町善福寺に開校し服部はその校長に就任した。この年の11月服部は日本基督教会歴史編集委員に選任された。山口英和女学校は翌25年後河原に移転し光城女学校と改称した。服部は山口教会牧会とともに光城女学校長として又他方面に活躍した。27年光城女学校は野田に移り洋館の宣教師館に接するに二階建日本建築の校舎は小規模ながら特色ある校風をもって周囲に知られるようになった。27・8年の日清戦役時に於ては服部は「広島ニ設ケラレタル大本營ニ山陽中会ヲ代表シテ天機伺ヲナシ此時ヲ利用シ第五師団ニ請願シ練兵場ニ於テ軍隊ニ向ヒ大演説ヲナシ且聖書会社長ノ依頼ニ応シ陸軍ニ聖書ヲ配与シ又呉港鎮守府ニモ共ニ此事ヲナシ、次ニ海軍兵学校ノ招聘ニ応シ江田島ニ渡リ旧知ノ者ニ会シ一夜講演ヲ開キ後テ懇談トナリ夜半ニ至ル」等独自の伝道をおこなった。又光城女学校はこれまでミッションより月額25円の補助をうけていたが、エーレス及びビゲロの斡旋によって米国北長老教会婦人外国伝道局の出資校となり生徒の授業料が経費に不足する全金額はその伝道局が出資することとなった。山口教会は30年7月服部の謝礼金を月14円となして独立自給を達成した。同じ頃服部は東京の教会大会に於て協同ミッションの7人の委員の1人に選任された。32年服部は光城女学校の校長をミス・ビゲロにゆずり牧会に専念することになった。その後服部は35年に神戸に転任岡山及び東京での伝道に従事し明治45年4月隠退し故郷吉敷村に帰って保養し大正5年1月30日流感にかかり永眠した。68才であった。

以上、服部章蔵の生い立ち及び入信の事情、中国地方伝道について概略をたどってきた。服部は明治期日本プロテスタント教会の指導者の多くが

明治維新の変革期に逆境を経験した士族階層出身者であるのに対して、彼は明治維新の主流にあった長州藩の武士の子弟として自身動乱中の生活を体験した。彼の知友の多くは新政府に栄達の途を得た。彼自身海軍兵学校教授として彼が志したならば此の世的な栄達の道も可能であったのである。しかし服部は彼の年来の人間の志実現の場に於て基督の福音に接し、彼自身の^{うち}衷なる変革に於てその生涯を一基督教伝道者としてささげ、日本に基督の教会を建設形成するために苦闘したのであった。